2026 年２月 22 日（大斎節第１主日、Ａ年）
メッセージ
「荒れ野にて」

（マタイによる福音書４：１-11）

司祭ヨセフ太田信三

アダムとイブは、善悪の知識の木の実を食べてしまいました。これは、「食べると必ず死んでしまう」と神が言った実です。善悪の知識を得て神のようになりたい、そのような存在になりたいという願望が人間の奥底にはあります。意識しないまでも、気づかぬうちに惹かれてしまう、とも言えるかもしれません。こうして、神に背いたアダムにより、すべての人が死の定めを負うことになりました。しかし、神は死刑を執行することはありませんでした。アダムとイブを楽園から追放しつつも、その命を奪うことしなかったのです。いや、追放というよりもむしろ、着物を与え、アダムとイブを楽園から荒れ野へと「送り出した」とすら読むことができます。ここに、神の深い人間への憐れみと慈しみがあります。こうして人間には、荒れ野で神に立ち返って生きるチャンスが与えられました。

アダムによって、すべての人間が死に定められました。しかし、同じ一人の人間＝イエスによって神はすべての人間に救いをもたらします。洗礼を受け、霊によって荒れ野へと導かれたイエスは、アダムとイブが追放されたのと同じ荒れ野において、アダムとイブの背きとはまったく逆に、悪魔の誘惑を受けながらも、神への従順にとどまりました。そして、このイエスに天使たちが従いました。これによりイエスは、楽園追放以来荒れ野でさまよう人間に対し、神に信頼して生きるなら、荒野であっても人は再び神と共に生きることができるということを、身をもって示してくださったのです。

イエスが荒れ野で受けた誘惑は、私たちの日常に溢れているものでした。このことは、私たちの日常は荒れ野なのだということを表しています。つまり、私たちは相変わらず、アダムとイブが追放された荒れ野にいるのです。しかし、アダムと同じ一人の人＝イエスによって、私たちすべての人に、再び神とともに生きる道が開かれました。ここにアダムと私たちとの決定的な違いがあります。大斎節、私たちはあらためて、自分自身が荒れ野に生きていることを確認し、日々襲ってくる誘惑と向き合います。大斎節の最初の主日。その荒れ野にあっても、神への従順にとどまったイエスの姿を見つめ、私たち自身の日々の有り様を省みたいと思います。